

児童養護施設における被虐待児の特性把握と 発達支援に関する研究

本多麻梨奈¹⁾ 上戸木綿子²⁾ 徳永瑛子³⁾ 岩永竜一郎³⁾

要旨：被虐待児の中に見られる発達障害や心理面・行動面の問題をとらえるために児童養護施設内の児童 129 名について施設職員から CBCL, ASSQ-R, ADHD-RS-IV の回答を受け分析した。その結果、被虐待児は期待度数と比較して ASSQ-R, ADHD-RS-IV のスコアに有意差は見られなかったが、CBCL の結果では外向尺度、ひきこもり、思考の問題、非行的行動、攻撃的行動において有意な差が認められ、被虐待児は反応性愛着障害の特性、自閉や ADHD の特性とよく似た発達障害児に見られやすい問題を持つことが示唆された。

キーワード：虐待，発達障害，行動評価，心理社会機能

はじめに

現在、虐待を受けて児童養護施設に入所する児が増えてきている¹⁾。厚生労働省が児童虐待の統計を取り始めた平成 2 年から年々相談件数は増え、平成 17 年度には 37,000 件を超えた。山本²⁾は虐待を受けた子ども等の心理的課題へのかかわりや子どもたちが表出する様々な行動への対応、分離後の親子関係の調整、家庭復帰が困難かつ問題を抱えた子どもの自立支援など、生活上の課題が多く生じていると述べている。平成 16 年には児童福祉法の改正により、虐待を受けた児童などに対する市町村の体制を強化することとなった。山本²⁾は、実親が存在していても適切な養育を受けられず入所に至る子どもが増加する等、多くの課題を抱えた子どもたちの入所に対し、施設での援助実

践は困難さを極めていると述べている。この現状を受け 1999 年より児童養護施設に「心理療法を担当する職員」の配置が可能となり、児童の心理面のケアの充実に向けた援助が行われるようになった。

虐待を受けた子どもたちは脳に器質的な問題が起こる可能性も指摘されており、脳科学の研究より問題行動や発達障害との関わりが高い傾向にあると言われている³⁾。また、坪井・李⁴⁾は CBCL と自記式である Youth-self-Report を用いて、児童の問題行動に関する調査を行い、対応する問題行動尺度すべてに有意な相関があることを報告している。虐待を受けた子どもたちは生活の中で発達障害に認められる多様な心理面・行動面の特徴と同様の問題を呈することを示唆している。しかし児童養護施設において入所児がどのような心理的・行動的問題を有しているのかといった現状を明らかにしている研究はまだ少ない。

本研究では、児童養護施設に入所する被虐待児を対象に、発達障害を含めて心理面・行動面の問題

1) 特定非営利活動法人 なごみの杜

2) 日本赤十字社長崎原爆病院

3) 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

を示す子どもの割合や生じている問題の具体的な内容を調査し、今後の児童養護施設における入所児童への対応、また支援の視点を見つけることを目的としている。

方法

1. 調査対象

長崎県内の児童養護施設3施設で生活する3歳から19歳(平均12:06±3:11歳)の129名(男児73名,女児56名)を対象とし、各施設の担当職員に対象児について子どもの基本属性、行動特徴、自閉症状、ADHD症状を調査するための質問紙に記載を依頼した。

2. データの収集方法及び手順

a) 質問紙への回答

上記の調査対象である児童養護施設の担当職員に施設に入所する担当児童1人1人に関して記入を求め1ヶ月後に回収した。

b) 調査内容・使用したツール

①子どもの特性把握のための調査

対象児童の性別、年齢、学年(通常学級 or 特別支援学級)、入所時年齢、医学診断、IQ、服薬状況、虐待(身体的虐待、ネグレクト、性的虐待、心理的虐待)の有無・種類、その他子どもについての心配な点について記入してもらった。

②小児行動質問紙(Child Behavior Checklist: CBCL)

CBCLは幼児期から思春期にいたる子どもの情緒や行動を包括的に評価する質問紙である。この質問紙は家庭での子どもの様子をよく知っている保護者あるいはそれにかかわる養育者が記入することが条件となっている。本研究で使用したのは年長児版(CBCL/4-18)である。

回答方法としては、子どもの行動、情緒、社会性の問題に関するそれぞれの項目(113項目)を最近6ヶ月の子どもの様子に鑑みて「あてはまらない(0点)」「やや又はときどきあてはまる(1点)」「よくまたはしばしばあてはまる(2点)」の3段階で評価する。また、子どもの問題について具体的に記述する項目が設けられている。

上記の結果は問題行動尺度として合計点で得点化される。心理的問題に関する8つの下位尺度(ひ

きこもり、身体的訴え、不安/抑うつ、社会性の問題、思考の問題、注意の問題、攻撃的行動、非行的行動)と2つの上位尺度(内向尺度、外向尺度)から構成されている。結果はパーセント値及びTスコアで表される。

③社会性・言語・行動・興味に関する質問紙(Autism Spectrum disorder screening questionnaire: ASSQ-R)

高機能自閉症やアスペルガー症候群などの自閉症スペクトラム障害の可能性のある児童をスクリーニングするための質問紙である。児童や青年の現在の様子について教師や保護者に記入してもらう質問紙となっている。27項目からなっており、「問題なし(0点)」「やや問題あり(1点)」「明らかに問題(2点)」の3段階で回答する。リスクを判定するためのカットオフポイントが設定されており、合計点がそれを超えるか否かで判定する。

④ADHD評価スケール:家庭版(ADHD-RS-IV)

18項目について、過去6ヶ月における子どもの家庭での行動を最もよく表しているものを「ないもしくはほとんどない(0点)」「ときどきある(1点)」「しばしばある(2点)」「非常にしばしばある(3点)」の4段階で回答する。これにより、不注意スコアと多動-衝動スコアが得られる。結果はパーセント値で表される。

3. データの分析方法および手順

入所児のデータと期待度数間でCBCL、ADHD-RS-IVのスコアの差を χ^2 検定にて分析した。この分析の対象から発達障害の診断を受けた子を除き、同じ分析をした。またそれぞれの虐待(身体的虐待、ネグレクト、性的虐待、心理的虐待)毎の有無で入所期間とCBCLのスコアに差が見られるか否かをMann-Whitney検定にて分析した。ASSQ-Rについてはカットオフ値となるパーセント値が明らかにされていないため期待度数との比較は行わず対象児の中のリスク児の比率を算出した。

また、入所期間とCBCLの尺度スコア(引きこもり、身体的訴え、不安/抑うつ、社会性の問題、思考の問題、注意の問題、非行的行動、攻撃的行動)との相関を見た。また、分析にはSpearmanの相関分析を用いた。

結果

1. 対象のデータ

子どもの特性把握の質問紙より、97名が虐待経験をすることが分かった。このうち29名は発達面の問題に関する診断を受けていた。診断の内訳は次の通りであった。精神遅滞13名、アスペルガー症候群6名、広汎性発達障害1名、注意欠如多動性障害(ADHD)7名(このうち2名は反応性愛着障害の診断もあり)、てんかん2名。また、虐待の種類に関しては表1に示している。対象の発達に関しては、知能検査の結果が明らかとなっているものに関しては表2, 3, 4に示している。表にはそれぞれ分かっている範囲で最新の結果を反映し、異なる検査の重複はない。

表1 虐待の種別人数

	身体的虐待	ネグレクト	性的虐待	心理的虐待
虐待あり	28	49	1	17
虐待疑い	21	26	9	26
計	49	75	10	43

2. CBCL スコアに関して

(1)対象児データと期待度数間の比較(表5)

CBCL のスコアについて対象児データと期待度数間を比較したところ、「総得点」に有意差が見られた(χ^2 値=14.418, $p < 0.05$)。また、外向尺度に有意差が見られたが(χ^2 値=29.150, $p < 0.05$)、内向尺度には有意差は見られなかった(χ^2 値=2.789, P 値=0.247)。

同じくCBCLの下位尺度においては「引きこもり(χ^2 値=15.874 p 値=0.000)」、「社会性の問題(χ^2 値=14.469 p 値=0.000)」、「思考の問題(χ^2 値=19.412 p 値=0.000)」、「注意の問題(χ^2 値=10.056 p 値=0.006)」、「非行的行動(χ^2 値=16.697 p 値=0.000)」、「攻撃的行動(χ^2 値=15.442 p 値=0.000)」のスコアに有意な差が認められた。一方で、「身体的訴え(χ^2 値=0.004 p 値=0.998)」、及び「不安/抑うつ(χ^2 値=2.366 p 値=0.306)」のスコアに関して有意差は認められなかった。

(2)発達障害の診断がない対象と期待度数間の比較(表6)

CBCL のスコアについて発達障害の診断を受けていない児と期待度数間を比較したところ、「社会性の問題」と「注意の問題」には有意差が認められなかった。これ以外の下位尺度における結果は対象児データと期待度数との間の有意差と同様であった。

(3)虐待の有無によるCBCLのスコアの差

それぞれの虐待の有無によってCBCLのスコアに有意差は認められなかったが、心理的虐待によって入所期間に有意差が認められた($z=2.945, p < 0.01$)。これは、心理的虐待がない児童ほど入所期間が長いことを示す。

表2 鈴木ビネー検査を受けた児のIQ値

鈴木ビネー								
IQ	51 ~60	61 ~70	71 ~80	81 ~90	91 ~100	101 ~110	111 ~120	計
男	1	1	2	6	2	7	1	20
女	1	2	4		2	3		12
計	2	3	6	6	4	10	1	32

表3 WISC-IIIを受けた児のIQ値

WISC-III								
IQ	51 ~60	61 ~70	71 ~80	81 ~90	91 ~100	101 ~110	111 ~120	計
男	1	3		7	8	1	3	23
女	1	3	3	4	3	2	1	17
計	2	6	3	11	11	3	4	40

表4 田中ビネー検査を受けた児のIQ値

田中ビネー								
IQ	61 ~70	71 ~80	81 ~90	91 ~100	101 ~110	111 ~120	120 以上	計
男	1		1	2	2	1		7
女		1		1		1	1	4
計	1	1	1	3	2	2	1	11

(4)入所期間とCBCLの関係

相関分析では「入所期間」と「思考の問題」に、負の相関が認められた ($r=-0.276$ $p<0.05$)。これは入所期間が長い児童ほど思考の問題が少ないことを示している。言い換えると、入所期間の短い児童ほど思考の問題があるということである。

表5 被虐待児のデータと期待度数間でのCBCL, ADHD-R-IVのスコアの差 (N=68)

			χ^2 値	P値
C B C L	内向 尺度	引きこもり	15.874	0.000**
		身体的訴え	0.004	0.998
		不安/抑うつ	2.366	0.306
	社会性 の問題	社会性の問題	14.469	0.000**
		思考の問題	19.412	0.000**
		注意の問題	10.056	0.006**
	外向 尺度	非行 的行動	16.697	0.000**
		攻撃 的行動	15.442	0.000**
	内向尺度		2.789	0.247
	外向尺度		29.150	0.000**
総得点		14.418	0.000**	
ADHD-R	不注意%		1.455	0.482
	多動%		4.220	0.121
	合計%		1.272	0.529

表6 発達障害の診断を受けていない被虐待児と期待度数間のCBCLのスコアの差 (N=68)

			χ^2 値	P値
C B C L	内向 尺度	引きこもり	15.442	0.000**
		身体的訴え	1.008	0.603
		不安/抑うつ	1.747	0.417
	社会性 の問題	社会性の問題	4.057	0.131
		思考の問題	10.047	0.006**
		注意の問題	2.536	0.281
	外向 尺度	非行 的行動	11.091	0.003**
		攻撃 的行動	10.402	0.005**
	内向尺度		3.054	0.217
	外向尺度		8.883	0.011*
総得点		23.103	0.000**	

3. ASSQ-Rのスコアと虐待

ASSQ-Rにおいて児童養護施設全体でみると129人中8人(6.20%),被虐待児では97人中5人(5.15%)がリスク域に入っていた。リスク域に入っていた児の虐待の種類に共通点は見られなかった。

4. ADHD-RS-IVのリスク児と被虐待児の比率の差

ADHD-RS-IVのスコアでは、「不注意(χ^2 値=1.455 p 値=0.482)」、「多動(χ^2 値=4.220 p 値=0.121)」、「合計(χ^2 値=1.272 p 値=0.529)」のいずれにも対象と期待度数間で有意な差は認められなかった。

考察

97名中虐待ありの児童が47名、虐待の疑いありの児童が23名、また被虐待児のうち29名は発達面の問題に関する診断を受けていたということから被虐待児は高い頻度で発達面の問題に関する診断を受けていることが分かった。

CBCLの結果より、対象児は「内向尺度」には期待度数との間に有意差は認められなかったが、この尺度に含まれる「引きこもり」に有意な差が認められた。一方で、「外向尺度」に含まれる「非行的行動」「攻撃的行動」に期待度数との間に有意差が認められることから、対象児は「引きこもり」という内向的な一面と「非行的行動」や「攻撃的行動」にみられるような外向的な一面を併せ持つ傾向があると推察される。宮本⁵⁾は“年少の被虐待児では極めて警戒的で内にこもるか、一見人なつっこいが表層的な対人関係しか持てないかの2つのタイプが認められる。こうした対人行動の特養は反応性愛着障害と呼ばれる。また年長時では、集団内での問題行動や反抗的攻撃的な行動が特徴である”と述べ、反応性愛着障害をはじめとする被虐待児の多面性を示唆している。本研究ではADHD-RS-IVにおける項目に有意な差は見られず、入所児にADHD傾向があるとはいえない結果となった。CBCLの結果を見ると診断を受けていない児では「社会性の問題」「注意の問題」ではスコアに有意差は見られなかった。しかし、「非行的行動」や「攻撃的行動」には双方に有意差が見られ、被虐

待児の傾向として外向性の行動の問題が多いことが示唆された。大原ら⁶⁾の研究でも本研究と同様に、施設入所児は「非行的行動」や「攻撃的行動」が有意に高いことを報告している。

ASSQ-R は高機能自閉症やアスペルガー症候群などの自閉症スペクトラム障害の可能性のある児童をスクリーニングするための質問紙であるが、今回の結果では大六ら⁷⁾が行った研究で報告されたカットオフ値を超える児の割合が 9%とされていたが、今回の対象児童では被虐待児の中に ASSQ-R リスク児が 5%であった。今回の結果では一般に見られるリスク域に入っている児童と比較すると少なかったため、被虐待児の中に自閉症のリスク域に入っている児童が多いとはいえないことが分かった。

「心理的虐待」の有無によって入所期間に差があったことから、心理的虐待があると入所が遅くなり入所期間が短くなる傾向にあることがわかる。これは、心理的虐待のみの児童は周囲の人々に気付かれにくいという可能性が考えられる。「心理的虐待」は比較的最近注目されるようになり、その概念自体が新しい傾向にあるため、最近になって把握される比率が高くなっていることも考えられる。菊池⁸⁾は“心理的/性的虐待については、虐待が表面化しにくく、対象者の把握も難しいことがあり実証的研究は少ない”と述べている。心理的虐待は表面化しにくい故に、仮に心理的虐待があっても気づかれにくかった、または介入しにくかったのではないかと考える。

さらに「入所期間」と「思考の問題」の負の相関が認められたことから、入所後、経過の中で徐々に思考の問題が改善されていくことが推察される。出野⁹⁾は外傷体験後に特有の症状として、再体験、回避、過覚醒が挙げられ、これらはストレスに対する正当な防衛反応であり、周囲の大人が子どもの状態を理解し、安心感を与える対応を続けることで、たいていの症状は自然に治まっていくことがほとんどであると述べている。

伊藤の調査¹⁰⁾では、「子どもの性格行動上の問題」に過度の不満や負担感を感じている職員が 92.0%と、他に不満や負担感に関連する項目と比較し多いこと、また平成 14 年度児童福祉施設実態

調査¹¹⁾では、子どもの情緒・行動面への対応などに職員は精神的負担を強く感じていること等が明らかにされている。

坪井¹²⁾は“1990 年から心理療法担当職員が導入されるようになったことは、子どもの行動や心理的課題に対する専門的な知見を他の職員が得る上で実践の質を高める要因となったと考えられるが、そのあり方については施設における心理担当教員の不明瞭な位置づけ、児童指導員との関係の難しさ等、期待は大きいものの組織として円滑にその役割が担えない状況し置かれる場合もある”と述べており、さらに山本²⁾は“施設が子どもの生活の場であることを前提に、それぞれの専門性はあるものの職員の視点が『子どもの生活』における支援であることが共有され、方向性が見出せるような関係性を構築しておくことが支援の鍵となる”と述べている。加えて“実践への批判や非難ではなく、職員の困難性を受け止め、助言できる存在が施設実践の客観性にもつながっていくのではないか”と述べており、子どものアセスメントの実施と職員間の共有の重要性を強調している。本研究で児童養護施設の被虐待児は発達障害と外向的な問題を呈していることが多いことが明らかになった。よって、今後発達障害、外向性の問題への専門的な対応ができる知識と人材が必要であると考ええる。

このような現状の中、今後これまで以上に児童養護施設において子どもの行動特性を把握しマネジメントする、専門家の視点を持った支援が必要になるのではないかと考える。またここで述べた支援に関して、子どもの生活や特性をアセスメントできる作業療法士が助言・介入していく等、他職種とともに活躍できる場面もあるのではないかと考える。

最後に研究の限界として、今回の調査での分析法の問題が挙げられる。今回研究対象となる被虐待児の年齢の幅がかなり大きいにも関わらず、一括で分析を行った。そのためどのような人たちが研究対象となっているのか全体像がつかめない可能性がある。

文献

- 1) 小木曾宏：児童養護施設・児童自立支援に入所する児童の現状と支援施策の課題．季刊社会保障研究 45 (4)：396 - 406, 2010.
- 2) 山本佳代子：児童養護施設における実践研究に関する一考察．山口県立大学学術情報 第4号：37-49, 2011.
- 3) 友田明美, 増田将人：子ども虐待と発達障害．小児科診療 74 (10)：1451, 2011.
- 4) 坪井裕子, 李明憲：虐待を受けた子どもの自己評価と他者評価による行動と情緒の問題 -CBCL と YSR を用いた児童養護施設における調査の検討-. 教育心理学研究 55(3):335-346, 2007.
- 5) 宮本信也：子ども虐待とその対応．小児科臨床 第53巻増刊号.
- 6) 大原天青, 楡木満生：児童自立支援施設入所児童の行動特徴と非虐待経験の関係．発達心理学研究 19 (4)：353 - 363, 2008.
- 7) 大六一志, 千住淳, 林恵津子, 他：自閉症スクリーニング質問紙 (ASQ) 日本語版の開発．国立特殊教育総合研究所分室一般研究報告書：19-34, 2003.
- 8) 菊池祐子：虐待・ネグレクト・急性ストレス反応．小児科診療 75 (5)：859-864, 2012.
- 9) 出野美那子：青年期前期における慢性反復性トラウマによる対人関係機能不全尺度改訂版の妥当性の検討．トラウマティック・ストレス 7 (2)：157-165, 2009.
- 10) 伊藤嘉余子：児童養護施設におけるレジデンシャルワーク-施設職員の職場環境とストレス-. 明石書店, 2007.
- 11) 才村純：子ども虐待ソーシャルワーク論．有斐閣, 214-225, 2005.
- 12) 坪井裕子：児童養護施設における臨床心理士の役割と課題．こころとことば 7：47-59, 2008.

Characteristics of battered children in child care institution

By

Marina Honda¹⁾ Yufuko Kamito²⁾ Akiko Tokunaga³⁾ Ryoichiro Iwanaga³⁾

From

1) Specified nonprofit corporation Nagomi-no-mori

2) The Japanese Red Cross Nagasaki Genbaku Hospital

3) Nagasaki University Graduate School of Biological Sciences

Abstract: The battered children in child care institutions are increasing. The subjects were 129 children in child care institutions in Nagasaki prefecture. Care staff of these institutions were responded questions in Child Behavior Checklist/4-18(CBCL), Autism Spectrum Disorder screening questionnaire (ASSQ-R) and Attention Deficit Hyperactivity Disorder Rating Scale IV (ADHD-RS-IV). Then the data of battered children were compared with expected frequencies. Although there were significant difference between the data of battered children and expected frequencies in Total, 'Externalizing score', 'Withdrawn', 'Social Problems', 'Thought Problems', 'Attention Problems', 'Rule-Breaking Behavior', and 'Aggressive Behavior' in CBCL, not in scores of ASSQ-R and ADHD-RS-IV.

The results suggested that battered children have problem concern with reactive attachment disorder and with similar behavior with ADHD or ASD.